

## 幕末尾張藩士中山家における家芸たる武術の位置付け

長 屋 隆 幸

### はじめに

江戸時代において、幕府や藩に仕えた武士は輕格と士分（士格）の二つに大きく区分されていた。すなわち、輕格とは騎乗を許されない身分の徒士・足輕・中間・小者たちのことである。江戸時代の軍学者大道寺友山が著した「武道初心集」によれば、輕格の職務は平時において主人の雑事をこなすことであり、そのため戦場において逃げ出すなどの不作法があっても大目に見られると述べられている。なお、彼らの身分は、原則的には一代限りのもので、世襲は許されていなかった。もっとも、おおくの場合は、退任者の跡をその子息や親類縁者が新規召し抱えの形で雇い入れられることで人員充足が図られることが多かった。

一方、士分とは原則的には騎乗することを許された身分で、先祖ないし自己の功績によって、その身分と知行・俸禄を世襲することが認められていた。大道寺友山によれば、士分らの最大の職務は、戦場において主人のために命を張って戦うことであり、それ故に輕格とは違い、身分や知行・俸禄の世襲が許されていたとする。このように、幕府や藩に仕える武士身分は職務の違いから以上の二つの階層に大別され、その相続形態には原則的に大きな違いが存在した<sup>(1)</sup>。

もっとも、幕府や大名へ仕える者たちの中

には、上記の原則に当てはまらない者たちが存在する。それは、儒学者を始めとする学者や藩医たちのように家芸をもって幕府・藩に仕える職人たちである。彼らの多くは、士分として遇された。しかし、彼らは一般の士分が戦場で命を張ることを一番の職務として主君に仕えているのに対し、家芸たる特殊技能、学者であれば学問、藩医であれば医術を以て主君に仕えていた。士分として遇されながらも、その名跡は相続人がその家芸に精通・熟練していることが前提とされた。そのため、一般の士分ならば原則許可されない百姓・町人らを養子として迎え入れ後継者とするこも、養子となる者がその家の家芸に十分精通・熟練している場合、比較的容易に許可がおりた。一方で、実子であろうとも、家芸に精通・熟練していなければ名跡を継ぐことが許されなかった<sup>(2)</sup>。

各藩で召し抱えていた武芸者も本来は学者や藩医と同じ、家芸をもって藩主へ仕える者たちである。彼らの職務は藩主や藩士へ武術を教授することであり、戦場でその技をもって戦うことではなかった。慶長8（1603）年に尾張の領主松平忠吉が稲富流創始者である稲富一夢を召し抱え知行を与えているが、その知行宛行状の差出は忠吉花押のみ、宛名は敬称なしの、職人らへ与える形式のものである<sup>(3)</sup>。彼らの名跡も学者や藩医同様に、家芸に秀でていなければ、実子であっても相続す

ることは難しかった。

ところが、武術は武士が修めるべき素養であったため、17世紀前半には一般の士分の中にも武芸者たちから免許皆伝をうけ一流をなすことを認められた者が生まれてくる。尾張藩では、そのような者にも師範の位置付けを与え、その武術を家芸として藩士たちへ教授させるシステムをとっていた。もっとも、彼らの身分は以前から得ている士分であり、世襲が許可される原則に変更はなく、相続者の家芸の習熟具合は家の存続には直接大きな影響を与えない。あくまで、彼らの職務は士分が果たすべきものであり、家芸である武術は副次的なものであった。

それでは、このような一般の士分でありながら武術を家芸とする者にとって、家芸とは家を維持するにおいて如何なる意味を持ったのであろうか。この点についてはあまり知られていないように思われる。

そこで、本稿では、尾張藩において一全流披甲鎧勝・短最流砲術・長沼流軍学を家芸としていた中山七大夫勝全が妻子に残した遺言書「七大夫勝全認置物覚」<sup>(4)</sup>の分析を通じて、一般の士分でありながら武術を家芸とする家における家芸の位置付けを検討・紹介してみたいと思う。

## 一、中山勝全とは

### 1. 中山家の家系

まず、最初に中山七大夫勝全がいかなる人物であったのか、彼の家系・家族を含めて確認することからはじめたい。

中山家の先祖勝時は、尾張国知多郡岩滑を領有し、織田信長に仕えている。彼は、永禄3(1560)年、桶狭間の戦い前後で徳川家康へ岩滑で会い、火縄100筋を献上したという。その子、勝政と勝尚は最初織田信雄に、後に徳川家康に召し抱えられ、それぞれ知行500石の旗本になっている<sup>(5)</sup>。勝尚の孫娘が、尾

張藩士で弓役・馬廻を勤めていた安井長高へ嫁ぎ、長忠・義勝・長清・長房兄弟を生む。この内、長清が母の姓を襲い、中山瀬左衛門と名乗った。彼は、後に尾張藩の支藩である梁川藩の初代藩主となる義昌扨従として召し出され新たに一家をなす。その後、彼は御徒頭や御用人を歴任し、知行300石を尾張藩から与えられている<sup>(6)</sup>。

中山家は、瀬左衛門長清以後、清純・清英・清幸と続く。もっとも、この段階では中山家は武術師範の家ではなかった。中山家が武術師範の家となるのは、清幸の跡を継いだ中山和清(初名清寛。幼名は新之助。通称新之助、大作、七大夫。号は後凋軒)の代になってからである。和清は、安永8(1779)年に父の遺跡知行250石の内、200石を相続、馬廻となる。その後、天明元(1781)年に御側小姓、同2年に御部屋小姓へと進み江戸詰を勤めるが、同5年に病気になったため小姓職を辞め、尾張へ帰って普請組寄合となっている。

回復後、彼は一全流騎射・練兵伝・披甲鎧勝および長沼流軍学を教授していた尾張藩士近松茂矩・茂武親子へ師事し一全流披甲鎧勝と長沼流軍学の免許皆伝を得ている(一全流練兵伝・騎射については不明)。さらに、短最流砲術を教えていた尾張藩士大井家へ入門し、これも免許皆伝を与えられている。そこで、和清は文化元(1804)年に藩に自己の屋敷の後庭に稽古場を開く許可を申請し許され、一全流披甲鎧勝と短最流砲術、長沼流軍学の三つを教授するようになる。ここに、ようやく中山家が師範家の仲間入りを果たすことになる。文化14(1817)年には、子弟教育が評価され、藩から毎年雑用銀7枚が下賜されるようになる。そして、文政8(1825)年には使番格となり、文政12(1829)年10月には先手物頭格へと進み足高50石を賜うも、同年11月に病死してしまう<sup>(7)</sup>。

和清の長男忠清は文武の才に恵まれ家伝の

一全流披甲鎧勝・短最流砲術・長沼流軍学を日夜鍛練を怠らず、将来を嘱望されていたが、文化14(1817)年に24才の若さで病去する<sup>(8)</sup>。

そこで、忠清に代わり和清の跡を継いだのが本稿で分析する遺言書を妻子へ残した勝全である。勝全(通称藤一郎、大作、七大夫)は、忠清の弟で、文政12(1829)年に和清の遺跡知行200石を継ぎ馬廻に、天保3(1832)年8月に寄合となる。和清は一全流披甲鎧勝と短最流砲術の武術師範も引き継いでおり、同年12月には門弟教育に力を注いだことが賞され毎年雑用銀5枚が下賜されることとなる。その後、天保5(1834)年には新御番となり、嘉永5(1852)年には、武術師範としての活躍が評価され、新御番のまま勤め向きは免除、武術教授をいっそう励むべしと仰せ付けられている。なお、勤め向き御免となったので、非役の者が負担する普請役の半分を負担するように命じられている。安政5(1858)年には書院番へと進むが、この時も勤め向き御免、普請役の半分負担を仰せ付けられている。そして、文久元年に隠居している<sup>(9)</sup>。

勝全の跡を継いだのが、子の勝重(通称大作)で、彼は文久元(1861)年12月に家督を相続し、馬廻となり、翌2年に大御番組へと移る。慶応4(1868)年には馬廻組与頭並・同格へと進み、父勝全から引き継いだ武術師範としての功績を認められ、父同様に勤め向き御免、普請役半分負担の恩典に預かっている。明治2(1869)年に版籍奉還がなされ藩政機構が改まると、一等兵隊を申し付けられるが、翌3年に依願辞職している<sup>(10)</sup>。なお、中山家の系図<sup>(11)</sup>によると勝重には、姉2人と兄弟4人がいた。姉のお金は永井氏へ、お増は御友氏へ嫁いでいる。兄の新之助は早世したようである。弟には虎之助清秋と竹内家の養子となった善之丞、早世し名前が伝わっていない弟が1人いる。

勝全には清雄・吉勝の2人の弟がいた。清雄(通称新八。号梅軒)は、弘化2(1845)年に尾張藩藩校明倫堂監生として切米8石3人扶持で召し出されている。彼は嘉永4(1851)年に切米4石の加増をうけ、同7年に儒者・新御番格、元治元(1864)年に明倫堂教授並、慶応3(1867)年に明倫堂教授となり、翌4年に本知切米50俵へと加増されるも、明治2(1869)年に隠居し息子の嶋次郎へ家督を譲っている<sup>(12)</sup>。

吉勝(通称重次郎、瀬左衛門)は、弘化2(1845)年に弓術稽古に出精しているとのことと5人扶持の支給となり、翌3年に切米25石5人扶持で弓役として召し出されている。元治元(1864)年には表御番へと進み、慶応4(1868)年に先手物頭格・神宮奉行附属弓隊取締、明治元(1868)年に神宮奉行参謀助役になっている。そして、版籍奉還後は御城御番一等兵隊を命じられている。なお、彼には重次郎という子がいた<sup>(13)</sup>。

なお、勝全・忠清・新八・重次郎の兄弟には中山家の系図や「藩士名寄」によると5名の兄弟が他にいるが、内2名が早世、2名が御友・杉崎家へ養子に入っている(図-1参照)。

## 2. 中山家の家芸

次に中山家が家芸として教授していた一全流披甲鎧勝・短最流砲術・長沼流軍学の三流派について確認してゆくことにする。

### (1) 一全流披甲鎧勝

一全流は尾張藩四代藩主徳川吉通が開いた「武道全流道しるべの伝」を、吉通に側小姓として近侍し、その際に伝習を受けた近松茂矩が改変し名称を改めたもので、剣・槍・練兵・甲冑伝・早乗・水泳・騎射・忍びなどを含む総合武術である<sup>(14)</sup>。先に見たように、中山和清が近松茂矩・茂武父子から伝授され、さらに勝全へと伝えられた。そして、中山家では、一全流の内、騎射や練兵伝に關す



図-1 中山家略系図(和清・勝全二代分のみ、一部女性・早世者を除く)

る部分などを除いた披甲鎧勝のみを藩士らへ教授した。

それでは、披甲鎧勝とはどのようなものであろうか。尾張藩士奥村得義が著した「松涛棹筆」に以下の記述がある。

一中山家流ノ披甲鎧勝ト云事、披ハ被ノ訛り、勝ハ徒ノ事にや、さあらハ披甲ヲ鎧歩行なるべきか、尤中山ノ門中ニハ着するはかりの事を披甲と云ひ、業を為スを鎧勝といふよしにも聞ユレハ、披甲ト鎧勝と二色と見ゆるなり、如斯ニ候時ハ能ク聞え侍り、彼ノ家流の專旨とする処ハ故実ハ一向ニ不論之、唯身ニ甲冑を着て疾く走ル、亦刀槍を持て頻りニ働く事を試ムル而已ノ流義なるよし、甲ハ元よりヨロイ<sup>日本紀ニカハラト云</sup>鎧古代の鎧をさすにあらず、身をヨロフ事を云ふなるへし、ヨロヒの事誤ハ白石の東雅ニ委く見えしか<sup>(15)</sup>

これによると、中山家では甲冑を着ることを披甲、その状態で業を為す（この場合、技を繰り出すことであろうか）ことを鎧勝であるとしており、故実などは廃してもっぱら甲冑を着用して早く走ったり、刀槍を振るう技術を磨く武術であったことが知れる。なお、近松家では試合を禁じていたが、中山家

では積極的に試合を行うことを奨励していた<sup>(16)</sup>。

ところで、門人たちは藩内においていかなる位置にあった者たちが多かったのであろうか。文化6(1809)年～天保10(1839)年・文久2(1862)年において、士分(他藩の者も含む)で中山家へ入門し、稽古場にきて一全流を稽古していた者の署名がある「一全流誓約」<sup>(17)</sup>には、270名の門人が名を連ねている。この内、尾張藩士の経歴を書いた「藩士名寄」<sup>(18)</sup>から経歴が確認できた者が130名、不明の者が140名である。経歴不明な者は、一生部屋住みで終わった者や他藩の者と考えられる。経歴がわかる130名中、知行高が一番高いのは渡辺半七の2000石で、これに山村主計1500石、上野内膳1300石、水野内蔵1200石、富永峯吉・滝川又左衛門・富永又八郎1000石が続く。以下、800石3名、700石3名、600石3名、500石4名、400～450石5名、300～350石9名、200～250石20名、100～175石43名、100石以下1名、扶持切米取31名、不明1名で、300石以下の者が六分の五程度を占めている。また、番方・役方の違いで見た場合、一貫として役方の職にあった者5名、役方から番方へ移った者1名、一貫として番方だった者84名、番方から役方



へ移った者10名、番方から始まり役方と番方の職を歴任した者23名、役方よりはじまり役方・番方を歴任した者2名、その他5名であり、圧倒的に一貫として番方であった者が多く入門していたことが知れる。なお、上記270名以外にも、尾張藩の輕格や陪臣、津藩・亀山藩など近隣諸藩の藩士ら数百名が中山家へ入門し稽古をしてもらっている<sup>(19)</sup>。

## (2) 短最流砲術

短最流砲術については「張藩武術師系録」<sup>(20)</sup>によれば羽星野入道短最が開いた流派で、尾張では大井家が伝授を受け尾張藩士らへ教授していたとある。また、「短最流系図」<sup>(21)</sup>によれば、短最と大井家の先祖八右衛門とは昵懇で、八右衛門が郡山藩本多家に仕えていた時分、藩主見分に際して短最に相談して披露していたが、ある時不意の見分があり短最に相談できなかった八右衛門は失敗をしてしまった。それを恥じた八右衛門は、郡山藩を辞した。そして、その子が尾張藩に召し抱えられ短最流が尾張に根付いたとする。なお、享保8（1723）年の「武芸師範之輩並門弟人数書上帳」<sup>(22)</sup>に同流派は見られないので、それ以降に尾張藩へ伝えられたようである。

中山和清はこの大井家から免許皆伝し、自らも師範として教授を行うようになり、さらに勝全が師範を引き継いだ。もともと、尾張藩では稲富流など他流の砲術が盛んであり、短最流は尾張藩では流行せず、天保6（1835）年には、勝全の弟である中山清雄と杉崎清左衛門（300石）、他に朝岡徳平（150石）・浅井孫平（150石）・浅井岩吉（150石）の5名しか中山家の稽古へ参加していない<sup>(23)</sup>。この内、浅井孫平は大井家の門弟で、中山家の稽古には同門として参加しているだけなので、実質門弟は4名だけである。以上のように、門弟が非常に少なかったため、勝全は一時期短最流の教授を止めている。嘉永7（1854）年に勝全は、藩へ「私儀師範仕候短

最流砲術門弟甚人少、内矢場修覆等不行届ニ付、修行之輩有之筋ハ同流大御番組大井兵馬稽古場江さし出候旨、先達而御達申上置候処、此節矢場修覆出来、門弟共も出来仕候付、去年丑十一月より相始申候 惣日数三日」<sup>(24)</sup>と、門人が少なく収入面で脆弱であり矢場の管理ができなかったため、師匠筋である大井氏へ門弟を預けていたが、門弟も増え矢場の修復もできたので稽古を再開したとの届出を出している。ちなみに、嘉永6（1853）年時の門弟は18名であり、かなり増加している<sup>(25)</sup>。

その内訳は、勝全子息勝重・清秋兄弟、勝全の弟清雄とその子息三喜丸、勝全妹の子高屋裕太郎・安次郎兄弟といった勝全身内が6名、寄合組150石大野新次郎、大御番150石朝岡徳平、大御番150石山本重郎右衛門、馬廻30俵（後50俵に加増）杉山光太郎、御徒目付組頭杉本喜兵衛と、佐々重次郎ら未だ家を継いでいない部屋住7名であった。したがって、門弟は身内の外は部屋住みが大部分を占めており、また家を継いでいる者も比較的小禄の者が多いと言える。また、門弟18名のうち11名は嘉永6（1853）年11月～12月の入門である。嘉永6年は、ペリーが一回目の来航をした年で、尾張藩も警護のため兵を出している。このような時勢が門弟増加につながったのであろう。

なお、中山家の矢場へは同門である大井家の門弟も修行をしにきている。嘉永6（1853）年・嘉永7（1854）年の稽古出精帳<sup>(26)</sup>によれば大井兵馬や大井家の門弟を含む40名の者が中山家の矢場に入出入りして稽古をしていることが確認できる。

## (3) 長沼流軍学

長沼流は長沼澹斎が創った軍学である。澹斎は最初美濃加納藩主松平光重に、その後久留米藩主有馬頼利に仕えたが、寛文8（1668）年に家庭の事情で浪人した。その後、天和2（1682）年に明石藩主松平直明に召し出され

るまで、江戸で中国の古典兵法や明の兵法の研究を行い、「兵要録」などを著述し軍学者としての確固たる地位を築いている。貞享3(1686)年、彼は母親の療養のために明石藩を辞した。その後、諸侯に招聘されたが応じず、元禄3(1690)年に56歳で死去した<sup>(27)</sup>。

尾張藩には澹斎の高弟である佐枝尹重に師事した近松茂矩によって伝えられた。尾張藩では、長沼流が入る以前から越後流・甲州流・楠流・小笠原流などの諸軍学が盛んであった。そのような中で、後発ながら長沼流は隆盛し、嘉永6(1853)年の軍制改革において、その教えが取り込まれるにいたるほど尾張藩において影響力を持つ流派に育つ<sup>(28)</sup>。

中山和清は、長沼流を『名古屋市史』人物編<sup>(29)</sup>では近松茂矩から伝授されたとするが、「張藩武術系録」では茂矩の高弟であった尾張藩士鈴木貞美から伝授をうけたことになっている。勝全は和清から長沼流の免許皆伝をうけ、和清亡き後、一全流・短最流同様に師範職を藩に願い出て許されている。もっとも、天保2(1831)年・同3年に藩へ差出した届出<sup>(30)</sup>によれば、眼病を患ったとの理由で持筒頭馬場三右衛門、大御番組御友喜四郎(勝全弟)へ代講を頼んでいる。そして、その後弟の中山清雄へ預けてしまい、手を引いてしまう。したがって、長沼流の師範職は名目上は勝全となるが、実際は清雄が行う形となる。勝全が清雄へ預けた理由であるが、彼が残した遺言書「七大夫勝全認置物覚」の中で、「拙者ハ一向不学ニ而難涉致し、新八江頼置候」<sup>(31)</sup>と、学問が苦手で苦勞したため、弟の清雄へ頼んだと述べている。なお、清雄が引き継いだ時期は定かではないが、和清死後弟子をほとんど取っていなかったのが、天保5(1834)年以降、入門者の数が増加することから考え、天保5年頃に清雄に任されたものと思われる。

寛政5(1793)年～安政元(1854)年4月までの門弟を書き上げた「長沼流入門録」<sup>(32)</sup>

には、門弟211名の名が見られる。この内、104名が尾張藩士と思われる者、107名が陪臣・他藩の者である。

なお、尾張藩士と思われる104名の内、「藩士名寄」により経歴が確認できた者は71名である。知行高が一番高い者は4000石の成瀬半太夫家と織田太郎右衛門家(嫡子捨吉も入門)の2家で、次いで成瀬瑞軒家(嫡子豊前も入門)3500石、間宮外記3000石、渡辺半七2000石、1500石の横井孫右衛門家(孫の市郎平も入門)・山村主計・渡辺監物の3家、1000石の瀧川又左衛門・天野藤十郎・富永孫一郎・肥田孫左衛門の4家が続く。以下は、800石4名、700石2名、600石4名、500石3名、400～450石4名、300～350石4名、200～250石4名、100～150石15名、扶持切米取15名、不明1名で、一全流や短最流の門弟と比較して高禄の者が多い。また、番方・役方の違いで見た場合、一貫として役方の職にあった者7名、一貫として番方だった者22名、番方から役方へ移った者21名、番方から始まり役方と番方の職を歴任した者18名、役方よりはじまり役方・番方を歴任した者3名であり、番方のみならず役方を経験した者も多く見られる。

## 二. 勝全遺言書に見る家芸の位置付け

### 1. 勝全遺言書「七大夫勝全認置物覚」の史料性格

前章では、中山勝全とその家族の履歴、また家芸たる一全流披甲鎧勝・短最流砲術・長沼流軍学の三流派について見た。これら確認した知識を前提に、本章では中山勝全が残した遺言書「七大夫勝全認置物覚」から、勝全が家芸たる武術に、家存続において如何なる位置付けを与えていたのかについて見てゆくこととする。

まず、勝全が著した遺言書「七大夫勝全認

置物覚」の性格について見てゆくこととした。本遺言書は、安政5(1858)年6月に勝全が「おのふ」という女性に宛てて残したものである。もっとも、本遺言書中に子供たちそれぞれへ宛てての遺言もあるので、「おのふ」一人に宛てたものではない。「おのふ」がいかなる女性か定かではないが、娘「お金」へ宛てた遺言部分に「はは様ハ不申及伯父伯母等目上之人ニ万事聞」とあるので、「お金」の母、つまり勝全の妻であろうと推測される。もっとも、翌6年に書き加えた奥書に「右之趣おのふへ頼置候処、むなしく被成、誠ニ――我等も致し方無之候、認直し候義も面倒故ニ其俥俥共ニ譲り申候事」とあり、「おのふ」が死去してしまい、本来なら書き直すべき処、面倒なので息子たちへそのまま渡したことがわかる。なお、息子たちは3条目に「家芸有之候付、幼年たり共三人之男子有之候付」とあり、この段階では未だ幼少であった。

勝全が本遺言書を記した理由・動機については、前書き部分に「我等事追々老年ニ及候付、身之上之覚悟可致事ニ候間、要用之事共今日心付記ス、我等当午年ニ至リ六拾貳才ニ及候、五十歳之節も少しツゝ認置候書付有之候処、十二ヶ年之内ニかわり候事共多、又再ヒ認替申候」と、寿命による死を覚悟すべき62才と年老いたので遺言を残すこと、また50才の時にも一度書いたが状況が12年でかなり変化したので書き直すことにしたとある。

さて、本遺言書の内容だが、前書き・後書きと本文34条からなる。表-1は、その内容について各条目ごとに簡単にまとめたものである。見てもらえばわかるが、各条目の内容に体系的なまとまりは見られない。この点については、後書きに「右条々思ひ出し候節々認候付、色々之事入まじり認有之候、前後ぶわけも出来不申、夫々御推察被成御よみ可被下候」と、思いのまま書き連ね体系だって書

いていないのでわかりづらいところがあるが、推察して読んで欲しいと勝全自身が書いている。

もっとも、その内容から大きく以下のカテゴリーに分けられる。すなわち、

1. 倅約・雑用銀・普請役など家の財政に関する記述(4・5・8・20・27・31・32)。
2. 子供の将来・教育についての記述(1・6・9・10・21・23～26)。
3. 家芸三流に対する記述(3・5・7・11～15・18・22・28・29・30・33)
4. その他の記述(前書き・2・16・17・19・34・後書き)

の4つである。

以下、カテゴリー別に、勝全が具体的にどのようにすべきと妻子へ指示しているのを見てゆくこととする。

## 2. 「七大夫勝全認置物覚」の内容

### (1) 財政に関する記述

最初に家の財政についてどのような指示を勝全がしているのか、この点から見てゆく。

本遺言書における財政に関わる箇条では、倅約をするようにと述べているものが目につく。まず、4条に以下の記述がある。

一我等家芸ニ付、親様之御蔭ヲ以追々結構蒙り雑用銀も家督後間もなく頂戴、并御役も引申候付、どうぞかうぞ取続キ居申候処、雑用上り并御役金も出候様ニ相成候而ハ中々以不行届ニ付、厳敷省略筋万事心ヲ用ひ、幼年たり共芸術ニ心ヲかけ候事第一二候、左候ハ人柄等之義も自然と宜方へ押うつり申候

これによると、勝全は家芸の武術を教授していることにより家督相続後すぐに雑用銀を頂戴するようになり、さらに御役も引いてもらったので、どうにか家計を維持できたとする。ここでの引かれた御役とは、前章で指摘

表-1 「七大夫勝全認置物覚」の各条における内容

前書き	今回遺言書を認めることにした理由。
1条	息子達に諸芸修行をさせるべき件。
2条	急病で物を言えなくなったら、この遺言書に従って欲しい件。
3条	稽古場存続のため息子らの教育を頼む件。
4条	厳しく儉約すべき件。
5条	稽古場祝儀は、儉約のため酒のみで済ますべき件。
6条	娘二人の縁談の件。
7条	知行宛行状・稽古場の諸具・書籍類の保管・手入を頼む件。
8条	儉約のために葬式・法事は簡略化すべき件。
9条	親類と仲良くすべき件。
10条	娘・息子の世話を頼む件。
11条	息子に長沼流返伝授をうけさせるべき件。
12条	短最流砲術相統方の件。
13条	長沼流・一全流師範願方の件。
14条	短最流師範願方の件。
15条	一全流披甲鎧勝相統方の件。
16条	困窮しても現在の屋敷を売却すべきでない件。
17条	離屋や表門ぐりは無用たるべき件。
18条	見分一覧などには畳具足などですまし、御覧の時のみ本甲冑を使うべき件。
19条	中山の姓を安井へ替えないようにとの件。
20条	役金の支払い方の件。
21条	子供たちの成人まで御世話御指導願う件。
22条	清雄より長沼流の書物など返却してもらうべき件。
23条	娘たちへの遺言。
24条	大作への遺言。
25条	三衛への遺言。
26条	末弥への遺言。
27条	師範家となり雑用銀を獲得すべき件。
28条	一全流諸勝負を続けるべきことと、師匠筋の近松家と出入稽古などすべきでない件。
29条	亡父が改良し違ふ部分もあるので長沼流についても近松家とは付き合わないにすべき件。
30条	御覧初めにおける服装の件。
31条	知行所納方については別帳に記してある件。
32条	知行所より諸役所への返納金の取り扱い方についての件。
33条	諸芸の書物の保管場所についての件。
34条	公用で江戸など他所で死去した場合、包みの歯を常德寺へ葬って欲しい件。
後書き	体系だって書いておらず、わかりづらい箇所があるが、推察して読んで欲しい件。

した普請役半分免除を指している。しかし、勝全が死んで子供の代となれば、雑用銀の支給はなくなり、普請役金免除もなくなる。そうなれば、家計を維持するのは難しくなるので、万事儉約するようとしている。5条では稽古場での祝儀は酒のみで済まし万事厳重にして家事納まり方を専一にすべきと述べている。また、8条では、以下のように述べている。

一我等如何様成事有之候共、万事格別ニ  
せい略して仕舞可被下候、物之入らぬ  
様ニ取納メ可被下候、入物等もさゝ板

同様之品ニ而とんと不苦候、必々りつ  
ばニする事ハ不相成候、只々跡の家内  
暮し方第一ニ心得、我等の身ニ付く事  
ハせいりやく第一ニ頼申候、法事ヲ始  
石塔の様之物迄ほんの印のミ頼入申、  
さうしきなども手がらく頼申候、雑用  
銀より御役金ハ出候付、呉々も跡の事  
を案し候付、我等之身ニ付候事ハ省略  
筋重々頼入申候、此段親類衆へも申伝  
可被下候

上記によれば、勝全は自分の死後に行われ  
る葬儀や棺桶・法事・墓石を可能な限り簡素



に致し、一家の暮らしが立つようにして欲しいとする。そして、自分の死後は役金を支払うのに充当してきた雑用銀がもらえなくなるだろうから、跡のことが気がかりであるとしている。

20条では「百姓ニつけこまれ年貢等不束成納方出来不申様せいへ御心懸可被成候」と、知行地の百姓につけ込まれ年貢取り立てに差し支えないよう心がけること、また「御役金ハ前年より覚悟致候様ならでハ中々以幼年等之旦那ニ而ハ不参候、(中略)、御役金ハ平田包上納とも自分ニ御持参之事、使ハ悪しく存候事」と、役金の支払いについては幼年の当主では前年から用意する位の心づもりがないと、なかなか用意しかねること、また役金を両替商平田家にて平田包に封印してもらう際や役金を納める際は自分の手で行うべきであり、使者を使うことは宜しくないとしている。

31条では知行所の納め方については別帳面に記してあることを伝えている。32条では諸役所への返納金について、代替わりしたことを理由にできるだけ返納を断るようにし、もし何口も返納が重なるようなことがあれば一口だけないし内金を支払ってそれ以外の返納を断ったり、或いは手代へ配符を1枚くらい贈って返納断りの仲介をしてもらったりと、臨機応変に対処せよとの指南をしている。

## (2) 子供たちの将来・教育についての記述

次に子供たちの将来や教育に関して勝全が如何なる指示を「おのふ」に出していたかについて見てゆく。まず、1条目で「御家中風儀之事追々御触厳敷御世話ニ付、格別ニ倅共三人并娘共行狀第一之事也、其上追々芸行修行筋急度心得可申候、此義重々申置候」と、行狀良く育てた上で、芸行、すなわち家芸たる武術をはじめとする芸事の修行をさせるように求めている。

6条では娘二人の縁談について、「縁之内

ニハ候得共、とても我等居合せ不申候而ハ相応之縁談も出来ぬ物」と、縁に関わる事柄ではあるが、自分が死去して居合わせぬ状況では身分相応の縁談を得るのは難しいであろうと述べている。そして、家計も苦しく、また知行所百姓から金銭を借りるのも難しい時節柄なので、「どうぞかうそ一生暮せさいすれば宜候付、どこへ成共うれ可被下候、是ハ誠ニ心懸リニ候」と、どうにかこうにか一生生活ができるのであれば、嫁がせて欲しいとし、この件が心掛かりだと述べている。

10条目では「於金・於増身持宜様御世話被下、於金外へ参り而も不義無之様御談し可被下候、於増へも同様ニ伝可被下候」と、娘らを身持ちよく育て、嫁いだら不義など決してしないようお話願うこと、息子たちについては「倅三人学問武芸其外小身者之事ニ付、万事心をくばり、成人之上格別之者ニ成様不及なから御申談可被下候」と、学問・武芸はもちろん、その他万事に気を配り成人した暁には一廉の人物になるよう育てて欲しいと述べている。

さらに、21条目でも「幼年子共成人之上共能々御しめし可被下候、此義父方母方共伯父・伯母等へも御頼可被成候事」と、親類たちの協力を得て子供たちを成人するまで教育しながら育てて欲しいとする。

23条から26条は息子や娘たちへ対して直接残した遺言である。娘には「はは様ハ不申及、伯父伯母等目上之人ニ万事聞、身持宜、外へ片付候ても右之趣ニ而、先方ニ而勤可被申候、兎角母之意ニ随ひ、そむき不申様可被致候事、外へ家し付候而も身持第一心得つゝしみ可被申候」と、母親や親類の言うことを良く聞き、身持ちを良くし、嫁いでも同様に暮らせとしている。また、嫡男の勝重へは「大作儀跡を取候者故、格別ニ諸芸出精可致、学問等も分け而出精致、家芸三流共すいび致さぬ様ニ頼入申候、行狀之事ハ申上も無之、急度心得可申候、家を大切ニ相続可致事」

と、跡取りとして格別に諸芸・学問に精を出し、家芸である一全流・短最流・長沼流の三流を廃れさせないこと、また中山という家を大切にしたいとしている。清秋と善之丞へは将来他家へ養子へ入る身なので、万事につけて出精し、母や兄の言うことを聞いて諸芸に出精し一廉の人物になるようにと求め、もしそのような人物になれば養子口など無いと心得よとしている。

以上のように本遺言状には、繰り返し子供の将来・教育についての記述が見られる。娘二人に対しては孝子かつ良妻に、息子三人には家芸たる三流は勿論、学問なども修行し一廉の人物に育って欲しいと勝全が望んでいたことがわかる。そして、ここに勝全の子供たちへの深い愛情が見てとれよう。

### (3) 家芸三流に対する記述

さて、勝全は家芸三流については、どのような指示を出しているのでしょうか。次にこの点を見てゆく。まず3条で稽古場の存続について以下の記述がある。

一家芸有之候付、幼年たり共三人之男子有之候付、稽古場之事ハ高弟衆始年番等世話役候衆中有之候付、夫へ頼成り合而取続キ居候得ば、月日の立ハ早キ物ニ而直ニ三人之男子成人致候間、成人之上ハ自分のはたらきニ而如何様ニも成る物ニ御座候、此由高弟衆へ頼、其外世話役衆へも頼、我等存念通ニ頼申候、夫ニ付而ハ倅共仕入第一之事ニ候、よく／＼心ヲ用ひ可被申候事

上記によれば、勝全は息子3人に家芸を継がせることを既定路線とし、その世話を稽古場高弟や年番らへ依頼するように述べている。そして、子供らが成人した暁には、彼らが自分の才覚で稽古場を切り盛りするであろうから、それまで息子たちへの教育をお願いするとしている。

さらに、11・12・15条で各流を具体的にどのようにして息子たちへ継承させるかにつ

いて、以下のように述べている。

一家芸三流師範願濟ニ候得共、長沼流ハ当時同家新八江預け師範ニ致し置、右方ニ而門弟世話致もらひ申候、倅共成人之後ハ何卒かへり伝授為致、師範致させ度、此段新八方へも兼而申述置候間、宜く頼入候、倅共学問等無之而ハ此義ハ別而六ヶ敷ニ付、学問出精致シ候様御世話可被下候、拙者ハ一向不学ニ而難涉致し、新八江頼置候、どうそ倅共江ハ伝授受候様頼入申候、是れが御亡父様江之勤ニ御座候、当時ハ長沼流行れ候付、此段分ケ而申置候事、新八方ニ而長沼流皆伝之衆も有之、大野氏初頼母子數衆中有之候事  
一鉄炮之義一向門弟衆無之ニ付、先年大井氏へ頼置門弟衆修行之義右方ニ而有之様頼置候、然処当時火術御世話ニ付、又々再興致し、しかし万一拙者居合せ不申節幼年ニ而ハ火術之宿不安心ニ付、成人致シ候まで師はん願濟之上、稽古之義ハ大井氏ニ而倅之修行并門弟衆共右方へ頼置候方可然存候、先年大井氏江戸るす中御預り申候事有之候、右之振ニ御頼被成候、此段大井先生御頼可被下候  
(中略)

一一流披鎧勝之義も尤師範行届キ不申候得共、是ハ門弟衆人数も多く候付、幼年たり共又々末々高弟衆世話も行届キ候物ニ候、しかし是も中々以幼年等にてハ足並大鎗などの道具調等参り兼申候、我等ハ御亡父様御蔭ヲ以雑用銀五枚ツ、年々被下候事、我等愚人なから此年まで取続キ参り居候ニ付、夫々かなりニ取廻し参り候得共、幼年或ハ他向之高弟衆出張稽古計ニ而ハ御苦勞多ニ候、他向之御方ハ夫々御自身之家事も有之物故、万事之取廻し及不申事共も御座候物也、依之倅共壯年ニ

及一人立<sup>りやうけん</sup>簡立候迄ハ山名の早打家内ニ而伝<sup>り</sup>候位之事も御座候付、せめて道具之世話并べり等之事位ハ参り候付、御心をくばり可被成候、一全流之事ハ代々格別ニ上より御しやうし品も有之候付頼置申候、合刃<sup>へ</sup>・大鑓・足並等ハ外之稽古場ニ無之芸故、折角御亡父様御取建之事ニ付、絶へ不申様頼入申候、雑用ハ上り御役金ハ出候様ニ相成困窮之中より六ヶ敷ハ候得共、門弟之内親類中并高弟衆年番衆へも夫々相談頼可申候事

上記によると、清雄へ預けている長沼流については息子たちへ返伝授させること、このことについてはすでに清雄に申し置いているので宜しく頼むとしている。そして、自分は学問が出来なかったため清雄へ頼んで預かって貰うことになったので、息子たちにはそのような事なく返伝授がうけられるように学問をさせよと述べている。さらに、それが亡父への追善になること、また近年長沼流が盛んに学ばれていることから、このような事を取り立てて言うのであると記している。

短最流については、男性が幼年の者だけしかいない家で火薬を取り扱うのは危険であるので、門弟が少ない時分に行っていたように、師匠筋である大井家へ門弟の世話と息子の修行を依頼するよう指示している。

一全流については高弟衆が多人数いるので息子たちの世話をしてくれると思うが、雑用銀がなくなるので足並や大鑓といった技に使う道具類を維持するのは財政的に困難であろう。また、幼年の息子たちや高弟による出稽古だけでは苦労も多く、かつ高弟たちもそれぞれ自分の家の事もあるので、万事において取り回しをするのは難しいであろう。されば、息子たちが成人するまでは道具の手入れだけでも行って欲しい。一全流は代々格別に藩より賞されてきた流派であるので、財政的には苦しいであろうが、他の道場にはない合

刃・大鑓・足並など亡父が発明した技が絶えないようにして欲しいとしている。

18条では、一全流に使用する甲冑について亡父和清と勝全自身とで自力で揃えてきたが、「次第二世ノ中やかましく、もふとんと甲冑類たしなく相成ニ付、ほんとうの番具足等ハ見分一覧等ニも可成丈出さず、たまたみ具足などニ而見分等相済シ、御覧之節本甲冑さし出シ可申方宜存之事」と、時勢柄甲冑の嗜みも無い者が多くなり本当の甲冑を使用して見せるのももったいないので、藩の見分一覧の際などには畳具足などの簡易な具足で済まし、本甲冑を使用するのは藩主が御覧の際のみにせよと言っている。22条では、清雄に預けてある長沼流の伝書類を返却して貰うようにと指示している。

27条では、雑用銀の請求について以下のように言及している。

一容易ニ済事ニハ無之とも、御亡父様雑用銀七枚、其上追々結構に御蒙り、我等も五枚、其上追々結構蒙り、雑用銀二代出候事ニ付、右由緒を以願ハ出シもらひ可申候、しかし逆も幼年等功分無之而ハ参り候義ニ而ハ無之とも、出願ハ御頼置、再三御頼可被成候、三ノ丸向御弟子方へ御頼可被成候、夫ニ付候而も倅成人行状宜、万事出精致さねば成り不申候、せいへ御世話頼入申、此義大作之目上之衆中へも頼可被下候、一々ハ認不申候

勝全は、容易なことではないが、亡父和清の時に雑用銀7枚、自分の代に雑用銀5枚と2代に渡り頂戴してきた由緒をもって、雑用銀を頂戴したいと願い出よとする。もっとも、幼年で何らの功績も無い者へは与えられないであろうが、名古屋城三ノ丸向御弟子方、すなわち三ノ丸に屋敷を持っている1000石以上の大身の弟子たちの力を借りて再三再四願い出よといっている。

28・29条では一全流・長沼流の師匠筋で

ある近松家とのつきあい方について、和清と近松家との約束で出入稽古をしないことになっていることを伝えている。そして、近松家とは距離を取って付き合い、和清が考えた技などを知られないようにすること、且つ近松家では行っていない「一全流諸勝負仕合」を絶えないよう続けろとしている。また、30条では藩主の御覧初めの時に着用する衣類について伝言している。

#### (4) その他の記述

最後に、上記3つのカテゴリーから外れたものについて幾つか紹介しておく。前書き・後書きについては前述した通り本遺言書を書いた動機と注意事項が書かれている。2条では、勝全が急病になり口が聞けなくなった際には、本遺言書にしたがって欲しいと言っている。16条では困窮しても屋敷を他人へ売却しないようにと、17条では屋敷に離れを造ることは不吉なので無用とし、もし作るならば縁づたいか屋根づたいにせよとしている。ちなみに中山家の屋敷は「家中いるは寄」<sup>(33)</sup>によれば「入江町長者町ヨリ西へ取付北」(現名古屋市中区栄二丁目)にあった。19条では、元の姓である安井の姓に改姓しないようにと言付けている。

34条では、万一今後江戸などへ詰めることになり、任地で死去することがあれば、遺骨代わりに一緒に包んで置く歯を菩提寺の常德寺へ葬って欲しいと述べている。そして、「呉々もさむらい之身之上いつ何時江戸ハ不申及、いづ方江でも参り候様被仰付候義難計ニ、平□ヨリ覚悟致し置候事」と、武士たるもの江戸のみならず色々な場所へ派遣されることがあるので、平生から覚悟しておくようにと言っている。

### 3. 「七大夫勝全認置物覚」にみる家芸の位置付け

以上、「七大夫勝全認置物覚」の内容について見てみた。つぎに、その内容を踏まえた

うえで、勝全が家芸三流を家存続のためにどのように位置付けようとしていたかについて考えてみたい。

結論から言うと、勝全は家芸三流を、家を支える収入源として見なしていると言える。そもそも、本遺言書を読むと勝全が自分の死後について懸念していることの一つに、妻子が経済的に暮らせてゆけるかがあったことは間違いない。そのことは、再三再四にわたり儉約を求めていることから確認できる。ではなぜ勝全は、妻子の経済状況を心配していたのであろうか。これは、中山家が以下のような財政事情を抱えていたからである。

勝全時代の中山家の基幹となる収入は、知行200石からの年貢である。『尾張御行記』によれば、中山家は中一色村・今宿村・大屋敷村・妙興寺村・熊ノ庄村の5ヶ村に知行を持っていた。ただし、中山家の知行が250石であった勝全祖父清幸の時代に、父和清は家が貧しいため書物を買えず苦労したというので<sup>(34)</sup>、知行からの年貢収入のみでは十分な暮らしは難しかったと思われる。そこで、足らない分は領民から御用金として借り入れることが行われるが、勝全の時代には「追々百姓人氣不宜罷成、万事不模通」<sup>(35)</sup>「知行所百姓なども金談筋次第二六ヶ敷二付」<sup>(36)</sup>と、領民が反抗的で借金の申し入れにも応えなくなっていた。20条では、年貢納入の際に百姓につけ込まれないようにとも言っている。で、幼年の当主を騙すような、たちの悪い百姓もいたのかもしれない。さらに、勝全の知行地は、今宿村以外は貧村ないし小百姓ばかりの村で、御用金を賦課するにしても領民の肩代わりができる豪農がいなかったであろうから、おのずと限界があったと思われる(表-2)。

中山家のこの収入不足を補完していたのが、雑用銀と門弟からの謝礼であった。前述したように勝全は門弟たちへの家芸伝授を評価され雑用銀を毎年5枚下賜されている。門



表-2 中山勝全知行所

村名	村 高	中山勝全知行高	村 況
中一色村	1515石1斗5升2合	44石5斗	(前略) 竹木少ク村立アシク小百姓ハカリ也、一体百石ニ四町六反九畝余ニ当リ地ツマリノ所ナリ、水落アシキ所ニテ一日雨フレハ上村ノ悪水三日モ四日モ溜リ、スヘテ沼田ハカリナリ (以下略)
今宿村	1335石8斗5升2合	41石1斗1斗9升2合	(前略) 村立大体ヨクシテ高ニ準シテハ戸口多ク田力足レリ (後略)
大屋敷村	846石4斗7升5合	26石5斗5升2合	(前略) 此村高ニ準シテハ戸口少ク、他村ヨリ九十人ホト承佃スト也、田畑多クハ御供所村富人伴左衛門ヒカヘ居ル由、サレハ村中ニ於テハ不足ナルカ故ニ、漸々置乏ニオヨブトナリ
妙興寺村	1526石1斗5升7合	48石8斗9升	(前略) 持高ハ平準ノ所ニテ小百姓ハカリ也、村立大体ヨクシテ竹木茂レリ (後略)
熊ノ庄村	1399石7斗9升2合	12石8斗5合	此村ハ、一村立ノ所ニテ小百姓ハカリ也、一体佃力不足ニシテ貧村ナリ (後略)

名古屋市教育委員会編『尾張徇行記』二・三・四 (名古屋市教育委員会、1966・1968年) より作成

弟からの謝礼については、史料がなく具体的にどの程度の収入となったかは不明であるが、嘉永6 (1853) 年時における一全流を学ぶ尾張藩士は173人、この他に同流を学ぶ陪臣や他藩の者がいることを踏まえば、相当の収入が中山家へもたらされていたと考えられる。また、勝全は普請役金も半分免除される特典に浴している。なお、残り半分の普請役金は、8条に「雑用銀より御役金ハ出候」とあるように、雑用銀から支払っていた。

以上のような形で、勝全の時代は家計を維持している。しかし、子供たちが幼少の段階で勝全が死去してしまうと、家芸に精通していないため雑用銀は召し上げ、普請役金半分免除の特典も失われることになる。さらに、門弟へ教授できないため、謝礼も期待できない。当然、中山家の家計は苦しくなる。このように、勝全が死去すれば、それまでの中山家の財政構造は瓦解してしまう。それ故に、勝全は先に述べたように妻子へ厳しく儉約するように指示しているのである。6条で身分不相応でも生活が成り立つ相手であれば娘を嫁にやるようにと言っているのも、かかる財政状況を踏まえての発言である。

したがって、勝全死後における財政構造を作り上げることは、中山家が家を維持するにあたり重要な事項であり、勝全が抱えた大きな問題であった。そして、この問題を打破する手段を、勝全は家芸三流を息子たちへ継がせ、師範につけることに見込んでいる。その一つが雑用銀の獲得である。勝全は、息子たちに家芸三流を継承させて師範につけ、27条でみたように2代にわたり貰ってきた由緒を根拠に、門弟の中で重臣の位置にある者の力を借りて雑用銀を獲得することを狙っている。また、長沼流の返伝授を息子らへうけさせることも、財政問題解決の一環であったろうと考えられる。前述したように、勝全は11条で、息子たちへ長沼流を返伝授させる理由につき、亡父の追善になるとすると共に、長沼流が流行しているからと言及している。この頃、藩の軍制改革へも影響を与えた長沼流は隆盛しており、門弟からかなりの収入が期待できた。また、前章で指摘したように勝全が継承した一全流・短最流の門弟と比較して、長沼流の門弟には重臣層が多く含まれている。雑用銀を獲得するために、かかる人脈を得る目的もあったのであろう。

勝全は利益にならないのであれば、稽古場を閉めることも否定していない。実際、前章で述べたように勝全は、門弟が集まらず利益にならなかった短最流の稽古場を一時期閉めていたことさえある。また、一全流に関しても15条で取り回しが難しければ子供たちが成人するまで道具の手入れのみしておくだけで良いと言っており、その間道場を閉めても良いと示唆している。勝全にとって家芸三流の位置付けは、中山家の財政状況を潤す手段であることが一番であり、その技術を広く伝授しなければならないといった使命感のようなものは希薄であったと言える。このような考え方は、家芸の存在が家の存続に直結する学者や藩医などとは意識面において大きな違いがあると言える。

もっとも、家芸をもって財政問題を解決しようとするこの手段は、息子たちが家芸に習熟しなければならない。そこで、勝全は息子たちへ修行に励むよう申し付けると共に、高弟衆や師匠筋の大井家、弟の清雄らへ面倒を見て貰う必要性を訴えている。他人に犠牲を強いながらも、財政問題解決のために息子らへ家芸を継がせようとする勝全の姿は、ある意味自己中心的と言える。しかし、裏返せば、それだけ勝全が妻子の行く末に大きな懸念を示していたことの証左であろう。

### おわりに

本稿では、一般の士分でありながら武術を家芸とした家において、家芸の位置付けが如何なるものであったのかを、その一例として尾張藩で一全流披甲鎧勝・短最流砲術・長沼流軍学を教授していた中山勝全が妻子に残した遺言書から分析した。

勝全にとり、自分の死後において、妻子たちが経済的に困窮しないかが懸念事項であった。そこで、彼は、息子たちへ家芸を継がせることでこの問題を打破せんと考えた。具体

的には、息子たちを師範につけて藩から雑用銀を獲得すること、また弟清雄へ預けていた長沼流を現在流行しており門弟からの利益が望めるとの理由から返伝授して貰うことを遺言状で指示している。なお、勝全は利益にならないのであれば、一時稽古場を閉めることも否定していない。彼が一番家芸三流に求めていたのは、家の財政問題を解決するための手段として機能することであった。

ところで、今回、中山勝全の武術への意識を考えたが、あくまで中山家という家の存続の中において、どのように家芸たる武術を位置付けていたのかという点に限定してしか考察できなかった。結果、彼が、家芸の武術を純粋な戦闘技術としてどのように見ていたのか、すなわち戦闘において十分有効な技術と見なしていたのか、それとも時代遅れの技術と認識していたのかという点については踏み込めなかった。

また、勝全が生きた時代は、幕府や多くの藩が西洋流砲術を受け入れ、西洋式に軍制を改めてゆく時代である。しかし、尾張藩では14代藩主徳川義勝を支えた国学者や和流武術の師家たち、彼らから教えをうけた番方の中級以下の家臣たちからなる保守・攘夷勢力派の金鉄党の反対により、西洋流軍制への切り替えがうまく進まなかったとされる<sup>(37)</sup>。

この金鉄党に、勝全自身が加わっていたかは不明である。しかし、弟清雄・吉勝・杉崎清左衛門、甥の清朗・重範・岩松左衛門や、一全流門弟の箕形八三郎・三浦六左衛門などは、金鉄党が天保10(1839)年に田安家の斉荘が12代藩主になることに異を唱え高須藩の松平秀之助(義勝)を迎えるべきと運動した際や、文久2(1862)年に14代義勝の藩政復帰・15代茂徳の退任、西洋流砲術廃止を訴えた運動に参加しており、金鉄党に属していたことが確認できる。このような人間関係において、勝全が金鉄党の反対派に属していたとは考えにくく、彼自身金鉄党ないし

そのシンパであった可能性は高い。そうであれば、彼の武術への思考が尾張藩へ何らかの影響を与えた可能性も否めない。これらの点については、今後の課題としたい。

## 註

- (1) 大道寺友山「武道初心集」(古川哲史校訂『武道初心集』、岩波文庫、1943年)。ただし、これはあくまで原則であり、田中藩の中小姓のように士分でありながら騎乗を許可されない者(藤枝市史編さん委員会編『藤枝市史』通史編下、藤枝市、2011年)、幕府の譜代・二半場の御家人のように軽格でありながら世襲が許可される者(笹間良彦『江戸幕府役職集成』、雄山閣、1965年)など、その実態は幕府・藩により様々であった。
- (2) 宇野田尚哉「儒者」(横田冬彦編『知識と学問をになう人びと』、吉川弘文館、2007年)、海原亮「藩医」(森下徹編『武士の周縁に生きる』、吉川弘文館、2007年)。
- (3) 宇田川武久『鉄砲と石火矢』(至文堂、1998年)。なお、宇田川氏は関ヶ原の戦いを前に石田三成が一夢が仕えていた細川忠興の大坂屋敷を襲撃し、忠興夫人ガラシャを人質として捕らえようとした際に、一夢が逃げたことについて非難があるが、忠興との関係が忠吉との関係と同じであれば的外れたものであるとしている。
- (4) 愛知大学総合郷土研究所所蔵。
- (5) 「寛政重修諸家譜」七五二 藤原氏良門流中山条(高柳光寿ら編『新訂 寛政重修諸家譜』12、続群書類従完成会、1965年)。
- (6) やなべの歩み編集委員会編『やなべの歩み』(岩滑コミュニティ推進協議会、1985年)、「士林浜廻」安井条(名古屋市教育委員会編『士林浜廻』4、名古屋市教育委員会、1968年)。なお、水野克彦氏にも、中山家の家系について御教授をいただいた。
- (7) 「藩士名寄」(徳川林政史研究所所蔵、同研究所ホームページにて確認)中山新之助条、名古屋市役所編『名古屋市史』人物編二(名古屋市、1934年)中山七大夫条、「名古屋人物史料」四(名古屋市鶴舞図書館所蔵名古屋市史資料所収)中山清寛碑条。
- (8) 「名古屋人物史料」四 中山忠清条。
- (9) 「藩士名寄」中山藤一郎条。
- (10) 「藩士名寄」中山大作条。
- (11) 愛知大学総合郷土研究所所蔵。
- (12) 「藩士名寄」中山新八条、名古屋市役所編『名古屋市史』人物編二 中山梅軒条、「名古屋人物史料」二十(名古屋市鶴舞図書館所蔵名古屋市史資料所収)梅軒先生墓誌条。
- (13) 「藩士名寄」中山重次郎条。
- (14) 綿谷雪『武芸流派100選』(秋田書店、1972年)、一全流目録(名古屋市鶴舞図書館所蔵)。
- (15) 「松濤棹筆」七(名古屋市蓬左文庫編『松濤棹筆(抄)上』、名古屋市教育委員会、1984年)。
- (16) 「七大夫勝全認置物覚」28条。
- (17) 「一全流誓約」(愛知大学総合郷土研究所所蔵)、「一全流誓約」(中山文夫編『各代芸術書門弟表』、私家版、1989年)。なお、後者は4名分重複していたので、その分は除いた。
- (18) 徳川林政史研究所所蔵、同研究所ホームページにて確認。
- (19) 「一全流入門録 当時入用之处 内稽古之分覧帳」(中山文夫編『各代芸術書門弟表』私家版、1989年)。
- (20) 名古屋市鶴舞図書館所蔵。
- (21) 中山文夫編『各代芸術書門弟表』(私家版、1989年)所収。
- (22) 蓬左文庫所蔵。
- (23) 「天保六年未四月朔日 短最流砲術稽古帳」(愛知大学総合郷土研究所所蔵)。
- (24) 「嘉永六年丑十一月 短最流砲術出精帳」(愛知大学総合郷土研究所所蔵)。
- (25) 「短最流砲術中山七太夫門弟」(中山文夫編『各代芸術書門弟表』、私家版、1989年)。
- (26) 愛知大学総合郷土研究所所蔵。
- (27) 有馬成甫監修・石岡久夫編集『長沼流兵法』(人物往来社、1967年)総論。
- (28) 名古屋市役所編『名古屋市史』政治編第二(名古屋市、1915年)。
- (29) 名古屋市役所編『名古屋市史』人物編二(名古屋市、1934年)。
- (30) 「天保二年卯七月大森氏え差出留」「(天保三年)当正月より同盆前迄諸稽古場えまかり出候日数」(中山文夫編『各代芸術書門弟表』、私家版、1989年)。
- (31) 「七大夫勝全認置物覚」11条。
- (32) 名古屋市鶴舞図書館所蔵。
- (33) 名古屋市鶴舞図書館所蔵。
- (34) 名古屋市役所編『名古屋市史』人物編二(名古屋市、1934年)中山七大夫条。
- (35) 「七大夫勝全認置物覚」31条。
- (36) 「七大夫勝全認置物覚」6条。
- (37) 岸野俊彦『幕藩制社会における国学』(校倉書房、1998年)。

本稿を書きあげるにあたり岸野俊彦氏をはじめとする尾張藩社会研究会の方々や水野克彦氏に様々な御教授、御助力をいただいた。ここに御礼申しあげたい。